

マルクスのアジア概念 (1)

—— ウィットフォージェル『東洋的専制主義』解題 ——

川 田 俊 昭

明治における優れた史家(にしてジャーナリスト)、山路愛山は、その『支那論』(大正5年刊)の冒頭の節に、「哀むべき支那研究」と題し、次のように述べている。(ウィットフォージェル『東洋的社会の理論』, 訳者序より)

「日本人民として、支那の現状を研究する必要を高唱したい。日本には、支那通というものがある。しかし、我々は、彼等の支那に関する知識が断片的であって、全体として徹底した理解のないことを残念に思う。我々は、日本人として、支那に対する明白な概念に欠乏している。我々は、支那に関する正直な、要領を得た観察を聞きたいと思う。他人の議論を促すために、我々は、先づ自身の説を提供する。これにより、支那に対する研究的精神を挑発し、我々の欠乏を感じている正当の知識に達することを得んとするは、我々の希望である。」

支那に関する知識が断片的、である限り、そこには、支那に関する半可通、所謂「支那通」——常識(的羅列)、はあっても、体系、乃至体系的統一——全体として徹底した理解のないこと、は当然である。換言すれば、そこでは、一つの原理、理念——概念、即ち、支那に対する明白な概念に欠乏している。支那に対する研究的精神……支那に関する正直な要領を得た観察……正当の知識——科学的認識、即ち科学(学問)が欠けているのである。

科学(学問)は、いかなるものでも——カントによれば、それ自体として、一つの体系である。それは、原理によって、建てられなければならぬ。——それは、いわばそれ自身のために存する建物である。(ワーゲンフェール『経済学における体系思考』)

「知識は、一つの理念のもとに全体の部分の必然的な関係において建築的な統一にもたらされることによって、科学的となるのである。」(三木 清『哲学入門』)

同じことを、同様に、言い換えれば、こうである。

「知識の集合は、個々の構成部分が一体系に組立てられることによって、科学となるのである。」(ゾムバルト『三つの経済学』)

科学は、むしろ、体系的知識に等しい。それ故、体系化は、科学的叙述の核心をなすものである。……個々の学科が体系的なる限り、それは、相対的に他のものと分離して限定

され、もしくはそれ自体で完結している。

カントの謂う。

「もし科学が、その限界を相互に侵し合うならば、それは科学の増加でなくてその畸形化である。」（『純粹理性批判』，第二版序）

「それ故に、科学は、個々の構成部分より、しかも、既にそれ自体の中に全体なる統一体を含んでいるところの統一的計画に従って建設されている、建築物の美しい姿において見られる。この設計案が、体系である。」（ゾムバルト）

ここでも、（上と）同じことを、同様に、換言しよう。

「体系的統一体とは、普通一般の認識を先づ科学的たらしめるものであり、普通の知識の総計から一つの体系をつくるものであるが故に、我々の認識一般においては、科学的なるもの das Scientifische の教義は、即ち建築学である。」（カント）

近代的意味における科学(学問)の古典的定義は、周知の如く——カントが与えた。即ち、彼は、原理によって整えられた認識の全体として、これを形式的に規定したのである。……「純粹理性は一つの完全な統一体をなすものであるから、もし理性の原理が、理性自身の自然的本性によって理性に課せられたあらゆる問題のうちの唯一つだけでも、解決するに不充分であるとしたら、我々は斯かる原理を構わず捨て去って差支えない。そうだとしたら、この原理には、他の問題をも一つ残らず解決し得るという充分な信頼を置くわけにはいなくなるからである。」

斯くして、それは、「厳格にその規定された領域内に留まり、体系化であり、専門学科を保持し、分析と結合を行って、合理的なるものを非合理的なるものからきれいに離し、信仰から知識を分離し、——その欲するままに従い——或は謙遜し或は誇張する。」

「体系的」性質は、むしろ近代科学の概念にとって、(本質)必然的な特徴として妥当する。

我々の科学——経済学について、その表徴を探れば、たとえば、こうである——「秩序」(ケネー)、「法則」(リカアド、マルクス)、「体系」(ゾムバルト、シュムペーター)、「関連」(アモン)……等々。

「概念は体系の中にあるのみ概念である。」(ゾムバルト『三つの経済学』)

「論理上相互依存関係にある個々の認識の一体系である学なるものは、論理上統一ある即ち我々の思惟にとって全く同じ性質を有する対象に関係せしめての外は考え得べからざるものである。」(アモン『理論経済学の対象と基礎概念』)

体系について、ゾムバルトは、『三つの経済学』第十二章「体系 das System」劈頭、(カント『純粹理性批判』を援用しつつ)次のように述べている。(一部、前のカント、

ゾムバルトからの援用が重複。)

「今、我々のなすべきことは、経済学を、『科学(学問)』と呼ばれるところの独立の精神統一に形成することの出来る、手段と道とを発見することである。知識の集合は、周知の如く、個々の構成部分が一体系に組立てられることによって、科学となるのである。これらの(科学的な)ものにおいて、言い得るすべてのことを言い尽したカントは、認識の体系的統一化の技術として建築学を語っている。『私は、建築学を、体系の技術と解する。体系的統一とは、共通の認識を先づ第一に科学とするとところの、即ち斯かる認識の単なる集合より一つの体系を作るものなるが故に、建築学は我々の認識一般における科学的なるものの学である。』」

実際、カントが個々の学科に建築学の姿を用いて以来、近代科学のこの特徴は繰返し強調されて来た。

ゾムバルトは続けて言う。

「それ故に、科学は、個々の構成部分より、しかも、既にそれ自体の中に全体 *Ganzheit* なる統一を含んでいるところの統一的計画に従って建設されている、建築物の美しい姿において見られる。この設計案が、体系である。しかし、この設計案を立てるには、多様な認識を一つの体系に総括し得るが如き理念 *Idee* を、必要とする。これは、カントの意味における理念であり、従って本体論的意味のものではなく、理念が『原像 *Urbild*』を意味せず、思惟手段として用いられる心像 *Gedankenbild* を意味するところの、論理的意味の理念である。それ故に、理念は、対象を目標とせず、むしろ理論的な意味統一を把握し、科学の諸前提であり、従って科学的認識の諸条件をつくり、科学の先験なる一種の概念、即ち『理性概念』である。……(換言すれば——筆者) 認識の体系的なるものを、即ち一原理から連関をつくり出すものが、『理性』である。『かかる理性的統一は常に一つの理念を、即ち認識の全体の形式についての理念を、前提とする。そして、この全体は、諸部分の一定の認識に先行し、各部分に対して、その地位と爾余の諸部に対するその関係とを先験的に規定すべき諸条件を包含しつつ、従って、この理念は、悟性認識の完全なる統一を要請し、これによって悟性認識は単に偶然的な集合ではなく、必然的法則に従って連関する体系となるのである。この理念は、それが規則として悟性に役立つ限り、客体に関する概念であるとは本来言い得られぬもので、むしろ、これら諸概念の普遍的統一に関する概念である、と言い得る。』」

マルクスが、『資本論』(第一版序文)において、「問題として取扱うのは、法則自体であり、鉄の必然性をもって作用し且つ貫徹する傾向なのである。……近代社会の経済的運動法則を闡明することが、この著作の最後の究極目標である」といった時、(自明

乍ら——少くとも、マルクスが、ゾムバルトその他同様に人間であり、彼が又認識を目指した、と前提される時）彼における——鉄の必然性、法則、たりと雖も、その実、やはり、同様手続きを得て把握された体系、カントの所謂「必然的法則」（前出——或は、三木 清の「必然的な関係」），であることに何ら変りはないのである。

ゾムバルトの「経済体系」（後出）……更にはマックス・ウェーバーの「理念型」（後に触れる）……これらも又、認識上、等しく（カントの「理念」同様），同様手続きに拠るものである。

「真理が存在する真の姿は、体系的思惟たり得るのみ。」（ヘーゲル『精神現象論』）

ゾムバルトは、更に続ける。

「理念の機能は、『悟性のみでは規則として不充分なる場合に、これを理念によって援助し、同時に、種々相違せるその規則を一つの(体系的)原理の下に一致せしめ、これによって、出来得る限り連関を創ることである。』『理性は、先づ経験に應用される悟性認識を前提として、その統一体を、経験よりも遙かに遠く及び得るところの理念に従って探し求める。』……『かかる理性概念は、自然から汲み取られるのではなく、むしろ我々は、自然に対してこれらの理念につき質問するのである（即ちこれらの理念の助けをもって——ゾムバルト）。そして、我々の認識が、これらの理念に適當でない間は、その認識が不足だと考える。』」

斯かる強力な理性、理性の働き（マルクスの所謂「鉄の必然性」をもつ），について、カント自身更には、次の如く、非情とさえ言うべく——飽くなく、強調する。

「純粹理性は、一つの完全な統一体をなすものであるから、もし、理性の原理が、理性自身の自然的本性によって理性に課せられたあらゆる問題のうち只一つだけでも、解決するに不充分であるとしたら、我々は、斯かる原理を構わず捨て去って差支えない。そうだとしたら、この原理には、他の問題をも一つ残らず解決し得るといふ充分な信頼を置くわけに、いかなくなるからである。」

以上、ゾムバルトにおいて、結局、得られるのは、「経済の概念」——彼の所謂「経済体系 Wirtschaftssystem の理念」である。換言すれば、それは、「経済的諸現象を、一つの体系に形成し得べき理念……。それは、経済のあらゆる本質的諸特徴を含有し、又、これら個々の諸特徴を、一つの統一体に綜括せねばならない。しかも、それは、……具体的、歴史的明確性に於てなされねばならない。」

ゾムバルトのそれは、ウェーバーの「理念型 Idealtypus」と、全く、同じである。

我々は、後に、それと同格の範疇として、ウィットフォーゲルによって殊更に強調され

た——マルクスの「生産様式 Produktionsweise」(或は生産関係, 生産諸関係=社会の経済的構造 ökonomische Struktur der Gesellschaft)を, 見出すであろう。

「ある与えられた, 歴史的に規定された社会の生産諸関係を, その発生, その生成及び消滅において研究すること——これが, マルクスの経済学説の内容である。」(レーニン)

先の山路愛山の言葉(それは又, 本稿の主意, というより, 私のウィットフォーゲル研究の意義(の一つ)をなすものであるが)——に止まらず, (私をして言わしむれば)昭和40年代の今日, 依然として, 我国において欠けているのは, 豈, 支那についてのみならず, アジアについての体系的理解——アジアの概念(理念), である。

嘗て, 私は次のように書いた。

「現今におけるアジアに関わる研究たるや, 真に多彩である。殊に本邦におけるや, アジア経済研究所(通称「アジ研」)の諸研究は, 本学の東南アジア研究(所)の範としても, 一見, 揺ぎない成果を誇りつつあるかの如きである。……大別して, それら諸研究は, 次の三つの類に分つことが出来る。第一に, 当該地域に関わる宗教, 政治, 教育, 法制……等, 社会的(社会学的)諸事情の研究である。第二に, 自然的, 風土的諸事情に関わる研究(自然科学的操作を経たものを含む)である。第三に, 経済的諸事情の研究, これは更に, 1) ごく, 一般的, 抽象的な変数——いわば, 「真空内における」経済——を基礎とした所謂「純粋分析」と, 2) 具体的, 特殊的事象を中心とした——主として個別経済を問題とする——その記述とに分れる。……これら諸研究につき, 敢て, 概括的批評を試みれば, 次の如きことが言える。先づ, この種の研究では, 最大公約というべく第一の研究については, それらが本来ベースとする筈の物質的, 物理的生活諸事情ないし経済的基礎, いわゆる「下部構造」の分析を欠いているため, 一部, 理論としての労作も, 客観的必然性を有し得ないこと, 更にその大抵について酷評すれば, 全体としての確固たる方法論の欠如は, それら諸研究を単なる風景画的描写(ウィットフォーゲルの所謂 die En-bloc Methode)に終らしめている。第二の研究も, 第一の場合同様, 研究上の主軸を欠くことが, これ又, これら諸事実についての単なる調査, 瑣末的涉猟(die Kurzschluss Methode)——多くの場合せいぜい半分しか妥当でないか或は完全に無意味であるところの——に終始せしめている。第三の, 1) については, 所詮, 論外というべく, 斯かる研究自体が, この種の主題にとっては, 研究の前提(条件)でもなく, ただその最後における仕上げとして(単なる)補助的機能しか果し得ない性質のものだけに, 他所から来たお客さん, としてしか, これを遇し得ない怨みがある。その唯一の優越は, それ自体としての展開が, 時に如何に無意味無内容な結論をしか導き出さないものであるにせよ, ともか

く、それが一つの理論であることによる。第三の2)については、第一、第二の場合について言えることが、略そのまま当嵌まる。その対象が経済的なものであるということ以上の何ものをも、我々に提示し得ない。……以上三者の欠を補って余りある方法、三者の諸研究のすべてを科学的次元において一つの体系に収束せしめ且つ夫々その適所に位置づける方法、その説得においてマルクスの所謂「鉄の必然性」を有する方法——その一つが、本稿の取扱うウィットフォージェル（嘗ての「正統派 マルクス主義者」——今日での「自由」の唱導者）の場合である。」

斯かる点、模範(というより、今や一つの規範)というべく、マルクス、……ウィットフォージェルにおけるアジア概念(経済的意味におけるアジア——概念)のお洩い、……惹いては、我々におけるそれらに匹敵する概念——体系(体系構造)の創成が、只管、期待される所以である。

「大ざっぱに言って、経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、及び近代ブルジョア的生産様式を、あげることが出来る。」(マルクス『経済学批判』序言)

アジア的特殊としての生産様式——所謂「アジア的生産様式」の問題にマルクスの注意が向けられたのは、1853年、彼が『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』紙上に「インドにおけるイギリスの支配」など諸論文を掲載し始めた頃のことである。

ウィットフォージェルは、その著『東洋的専制主義 Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power』(1959)に書いている。

「1850年代に、特定のアジア的社会の考えが、新発見のような力でマルクスを動かし、と。

1853年6月2日、マルクスはエンゲルスに宛て、(F・ベルニエからの引用と併せ)次の様に書いている。

「『この国(モガル大帝の国)独特の事情と政治、即ち、国王が王国内のすべての土地の単独唯一の所有者であること、その必然的帰結としてデルヒやアグラのような一首都全体が殆ど民兵隊のみによって生活し、従って、国王がある期間戦場に行く場合にはこれについて行かざるを得ないこと、従って、これらの都市は決してパリの様なものではなく、又そのようなものではあり得ず、適切に言えば、野原よりも多少ましな多少便利に設備された野営地に過ぎないこと……。』ベルニエが東方の——彼はトルコ、ペルシア、ヒンドスタンのことを言っているのだが——すべての現象の基礎形態を、私的土地所有の存

在しなかったことのうちに見出しているのは、正当だ。これが、東洋の天国に至る現実の鍵である。」

これに対し、エンゲルスは、マルクスの斯かる見解に基本的に一致し、マルクス宛て、次の様に書いている。

「土地所有権の欠如は、実際、全東洋に至る鍵だ。そこに、政治及び宗教の歴史がある。だが、東洋人が土地所有に至らないということは、封建的なそれにさえ至らないということは、どこから来るのか。思うに、主としてそれは、地勢に結びつけられた気候にある。特に、サハラからアラビア、ペルシア、インド及びタタールの地を横切って最高のアジア高地にまで連なる大砂漠地帯と結びつけられた、気候にある。ここでは、人工灌漑が、農耕の第一条件だ。そして、これは、共同体か、地方政府か、或は中央政府かの任務だ。即ち、財政(内国の掠奪)、戦争(内国及び外国の掠奪)及び土地事業、再生産のための配慮だ。……人工的な土地の肥沃化は、用水路が崩壊すると、忽ち枯渇してしまう。以前には見事に耕されていた全地帯(パルミーラ、ペトラ、イエーメンの廢墟、エジプト、ペルシア、及びヒンドスタンの諸地方)が今荒廢に帰しているというもし人工的でない場合にも珍しい事実も、それで説明される。たった一回の焦土戦争によって、一国が幾世紀にも亘って無人の地と化し、そしてその全文明をはぎとってしまったという事実も、それで説明される。」

ここで、エンゲルスが、所謂「アジア的停滞」の根本的原因として、地勢に結びつけられた気候、即ち、地理的条件を挙げていることが、我々の場合殊更に重要である。何故なら、そのような観点が、引続き、プレハノフ(レーニン)……ウィットフォークゲル、と発展していくからである。

ウィットフォークゲルは、『支那の経済と社会』に、言う。

「元来、マルクス、エンゲルスが、50年代に『アジア的社会』と名付けたところの社会を研究した時に、完全に兩人一致して、気候及び土地という全然特殊な諸関係への論及をもって始めた。彼等の見解に従えば、斯かる諸関係の上に、全然一種特別な社会的、政治的生活諸形態をもった一つの特殊な農業生産様式が、発展したものなのである。」

マルクスは、論稿「インドにおけるイギリスの支配」に、(エンゲルスと全く同じく、土地及び気候(地理的条件)への言及をもって)書いている。

「気候や土地の諸条件、特にサハラからアラビア、ペルシア、インド、そしてタタールを経てアジアの大高原に至る広大な砂漠地帯は、東洋的農業の土台である運河と水道による人工灌漑の出現を導き出した。エジプトやインドにおけると同じく、メソポタミア、ペルシア等においても、洪水は土地を肥沃するのに利用され、高水位は灌漑用運河への給水

に好都合である。水を経済的且つ共同体的に使用するというこの最大の必要性が、西洋ではフランドルやイタリアでのように、自由企業を自発的な結合の方へと押しやったが、文化の水準が極めて低く土地の面積がペラ棒に広くて自発的な結合がとても出来なかった東洋では、それが中央集権的な政府権力の干渉を必要とした。」

気候や土地の諸条件(自然的条件)が、中央集権的な政府権力(社会的条件)を、余儀なくさせたのである。

インドを例にとれば、次のような社会的条件(アジアの停滞、アジア的社会——東洋的社会)を。

「政治的表面におけるあらゆる盲目的な運動にも拘らず、アジアのこの部分(インド)がもっている停滞的性質を完全に説明するものは、二つの相互に支持し合う事情だ。(1)土木事業は中央政府の仕事である。(2)それと同時に、全国が、数個の大都市を除いて、完全に別個の組織を持ち、それ自体として一つの小世界をなしていたところの村落に分れている。」(マルクスのエンゲルス宛書簡、6月14日)

村落——村落制度。マルクスは、如上の書簡と同一内容を、「インドにおけるイギリスの支配」に、次の如く、繰返し、書いている。

「インドではこれまで、どんなに政治の姿が変わったように見えても、その社会的条件は、最古の時代から変ることなく19世紀の最初の10年代まで及んだ。……これら二つの事情——一方では、インド人が東洋のすべての国民と同じく、大公共事業の世業という農業及び商業の第一条件を中央政府にまかせたこと、他方では、インド人が国中に散らばっていて、農業と手工業との家内的結合によって小さな中心をかたちづくっていたこと——これら二つの事情は、遠い昔から、独特の性質をもった一つの社会制度——いわゆる村落制度を生み出していた。」

「ポtail(村長)は、大抵の場合、世襲である。これら共同体のあるものにおいては、その村々の土地は共同で耕されているが、多くは、各占有者が自分の田地を耕作している。家のうちには、奴隷制とカストの組織。荒蕪地は共同放牧用。婦女子による家内紡織。隣接の村落に対し自分の村落の境界を細心に見張ることだけしかないこれらの牧歌的な共和国……停滞状態にあるアジア的専制主義のこれ以上強固な基礎を考えることは出来ない。」(前掲書簡)

斯かる(自給自足的——農業と(手)工業との結合、統一による)村落共同体——それが、アジア的社会の停滞的性質を解く鍵(の一つ)を与える、とマルクスは『資本論』において、(次の如く)具体的、詳細に述べ、且つ結論を導出する。(やや長文乍ら、その全文を援用することが通常一つの慣行になっているようなので、私もそれに倣うこととす

る。尚、以上、マルクス、エンゲルスからの私の援用の順序、方法に注意。単なる援用の並べ方でさえ、私と他の場合との論理——その展開と結論は、斯くも異ってくるのである。)

「部分的には今日尚存続しているインドの太古的な小共同体は、土地の共有と、農業と手工業との直接的結合と、新たな共同体の設立に当って既定の計画及び設計図として役立つ固定した分業とに、基礎を置いている。それらは、自足的な総生産体をなし、その生産地域は百エーカーから数千エーカーに至るまで種々である。生産物の主要量は、この自治体の直接の自己需要のために生産されるのであって、商品として生産されるのではなく、従って、生産そのものは、商品交換によって媒介されるインド社会の全般的分業からは、独立している。生産物の余剰のみが、商品に転化され、しかも、一部分は、国家の手によって初めて転化される。国家には、太古以来、一定量が現物地代として流入するのである。インドでも、地方によって、共同体の形態が異っている。最も単純な形態にあっては、自治体が土地を共同に耕作して土地の生産物を成員間に分配し、各家族は紡いだり織ったりすることなどを、家庭的副業として営む。これらの同種のことに従事する大衆の他には、次のようなものが見出される。裁判官と警察官と収税官とを一身に兼ねている『人民の長』。農耕に関する計算を行い、それに関する一切を査定し記録する簿記係。犯罪者を告発し、他処からの旅人を保護して一村から他村に案内する第三の役人。近隣の自治体に対して自分の自治体の境界を見張る境界見張人。農耕の目的のために共同貯水池から水を分配する水番。宗教的礼拜の役目を行う波羅門。共同体の児童に砂上で読み書きを教える教師。占星者として播種収穫の時期及びあらゆる特別の農耕労働の時の適否を告げる暦術波羅門。すべての農具を製造し修繕する鍛冶工と大工。村のためにすべての容器をつくる陶工。理髪師。衣類を清潔にするための洗濯工。銀細工師。ある自治体では銀細工師の代りに、他の自治体では教師の代りに、ところによって見られる詩人。この一ダースの人員は、全自治体の費用で、養われる。人口が増加すれば、新しい自治体が古いものに倣って、未耕地に設けられる。自治体機構は、計画的な分業を示しているが、しかし、工場手工業（マニュファクチュア）的分業は、不可能である。鍛冶工、大工等に対する市場は不変であり、せいぜい、村の大きさの相違によって、一人の鍛冶工、陶工等の代りに、彼等の二人か三人が見られるに過ぎないからである。自治体の分業を規制する法則は、ここでは、自然法則の不可侵的權威をもって作用するが、鍛冶工などのような各特殊手工業者は、伝統的な仕方によって、しかし、独立的に、且つ彼の仕事場における何らの權威をも認めることなく、彼の専門に属するあらゆる作業を行う。絶えず同じ形態で再生産され、時に破壊されることがあっても同じ場所に同じ名称で再建されるこれらの自足的な共同体の、単純な生産的有機体は、アジアの諸国家の絶え間なき崩壊と再建及び休みなき王朝の交替とに対して著しい対照をなすアジア的社会の、不変性の秘密を解く鍵を与える。社会

の経済的基本要素の構造は、政治的雲上界の嵐によっては影響されることなく、保たれているのである。」

斯かる「牧歌的な共和国」(前掲書簡)——村落共同体……マルクスは、「インドにおけるイギリスの支配」に、(痛烈に)註して言う。

「我々は、これらの牧歌的な村落共同体が、どれ程無害のように見えようとも、それらが常に東洋的専制主義の強固な基礎であった……ということを忘れてはならない。……我々は、これらのちっぽけな諸共同体が、カーストの区別や奴隷制の刻印を帯びていた……ということ、それが人間を外力の支配者の地位に高めないで、却って、これに従属させたこと、これらの共同体が自分の力で発展することの出来る一つの社会状態を不変の自然的運命に変えてしまったということ……を忘れてはならない。」

エンゲルスも(同じく)『反デューリング論』に言う。

「古い共同体がずっと存続して来たところでは、それは数千年このかた、インドからロシアにいたるまでの、もっとも粗野な国家形態である東洋的専制主義の土台となっている。こうした共同体が分解したところでだけ、諸民族は自分自身を越えて更に前進したのである。」

「いわゆる『アジア的生産様式』は、地理的区分としてのアジア、或は東洋のみが関係するところの社会系統ではない。それはアジア、或は東洋から独立し得たいわば人類史的範疇である。」(森谷克巳『アジア的生産様式論』)

ソヴィエトにおけるアジア的生産様式論の第一人者、ヴァルガは、論稿「アジア的生産様式について」に、書いている。

「マルクスのこれらの所説から、次のような結論がはっきりと出て来る。(1)『アジア的生産様式』概念は、アフリカの広大な諸地方がこの中に含まれているから、地理的な意味において理解されてはいけない。それ故、彼は、『アジア的社会』という用語と並んで、『東洋的社会』という用語を用いている場合もある。(2) マルクスがアジア的生産様式概念を適用したのは、アジア全体に対してではない。彼は、降水量が農業生産にとって充分でなかったような諸地方に対してのみ、この概念を適用したに過ぎない。それ故、わが国の中国学者達が行ったように、単に中国の諸条件にのみ立脚しながらアジア的生産様式問題を解決しようと試みるならば、それは無意味なことであるということになる。なにしろ、中国の大多数の諸地域における降水量は、灌漑を行わなくとも農業にとっては充分であり、しかも、収穫高を高めるために灌漑を必要とする程人口密度がまだ大きくなかった往時においては、特にそうであるからだ。」

ヴァルガが中国について述べたこと(かかる慎重自体、問題がないわけではないが)、日本の場合についても言い得る。

「日本の場合……多数の地方的な河川が存在し、その治水諸課題はいずれも全地域的でなく、地方的に遂行され得る。しかも、日本は大陸の諸国と異り、外族の侵攻に脅かされることも少なかった。そのため旧時の日本においては、その灌漑的基礎の故に多分に東洋的な色彩をもつ封建社会であったとはいえ、とにかく封建的秩序が長期に亘って存立し得たのである。」(森谷「アジア的経済形態」)

アジア的生産様式を「封建的」な一亜種(変種)とする戦後のソヴィエトその他における(誤った)方向は、むしろ、日本にこそ適用さるべきものである。

「日本は、支那とインドとは対蹠的に——私の見解によると——『アジア的』社会の定型には属しない。日本の前資本主義的社会秩序には、灌漑経済の広袤の性質が、欠けていた。むしろ、我々は、前資本主義的日本において、明々白々な封建的秩序をこそ、指摘せねばならぬのである。勿論、それは、日本封建制にも、全く特殊な必要を附与した集約的灌漑経済の基礎の上に立ってのことなのであるが。それ故に、アジアの他の国々の経済構成体に対しては、誤って適用されたにしろ、『アジア的封建制』なる方式は、日本においては、まさに採用されるべきものである。」(ウィットフォーク『支那の経済と社会』, 日本版序)

「『マルクスは、アジア的生産様式によって、アジア的変種の封建制度を理解していた。』……このような回答に対して、私は憤慨し、この東洋学者に次のような反論を加えておいた。即ち、マルクスは、自分の考えを言葉において表現する能力では卓越していた。もしも、彼が、アジア的生産様式によって封建制度の一変種を念頭に置いていたとするならば、彼はそのように述べたであろう、と。」(ヴァルガ、前掲著)

第二次大戦中、ソヴィエトで発表されたマルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態』においても、以上の如き(アジア的生産様式に関するマルクスの)基本的見解に、特に著しい変化があったわけではない。

むしろ、(私をして言わしむれば)以上の記述を、その諸前提より吟味、原理的(哲学的)に綜括すべく体裁を有する。

換言すれば、マルクスにおける思索、論理、体系化の順序(完成された著述では通常カットされ或は覆いかくされているところの、未完のスケッチにのみ相応しく且つ貴重であるところの)を我々に示す。

と共に、彼の経済(学)的論理(『資本論』に一般化されている如き)が、かなり密度の高

いものとして、そこに組み込まれていることに、我々は気付くべきである。

その展開の途中より、——即ち諸前提の初めのいくつかを敢て省略することによって、アジア的生産様式についての記述を中心に——援用すれば、こうである。

「……種族共同社会、自然的共同体は、土地の共同体的取得(一時的な)と利用との結果としてではなく、その前提として、現れる。……自然生的種族共同社会、或は、いわば群居団体は、人間の生活と、自己を再生産し対象化するその活動(牧人、狩猟者、農耕者等々としての活動)との、客観的諸条件を領有する第一の前提(血統、言語、慣習などの共通性)である。……個々人は、いずれも所有者又は占有者としてのこの共同体の手足として、その成員として振舞うに過ぎない。……この形態は同一の基本関係を基礎としているが、それ自体、極めて種々様々な形で実現され得るのである。たとえば、大多数のアジア的基本形態におけるように、総括的統一体は、これらすべての小さな共同体の上に立ち、上位の所有者或は唯一の所有者として現れる。……そこで、この場合、個々のものは、實際上、無所有であるか、又は所有——即ち、個人のものとしての、客観的な非有機的自然として現存する。個人の主体性の肉体性としての、労働及び再生産の自然的条件に対する個人の関係——は、多くの共同体の父である専制君主に具現される綜合統一体が、特殊な共同体を介して個人に分譲する結果、個人にとって間接的なものとして現れる。その剰余生産物は、ともかく労働によって現実に取得した後で法的に規定されるが、そのために自ずからこの最高統一体に帰属するのである。東洋の専制主義と無所有性との内部では、無所有性は個々人の間に法律上存在するように見えるけれども、実際には、この種族、又は共同体の所有を基礎として存在しているのであって、この所有は多くの場合、小さな共同体内部の工業と農業との結合によって、生み出され、斯くして、この小さな共同体は全く自給自足的なものとなり、又再生産と剰余生産の一切の諸条件をそれ自身の中にもっている。その剰余労働部分は、結局は人格として存在する上位の共同社会のものとなり、又この剰余労働は貢納等の形で行われることもあれば、又半ば現実の専制君主、半ば観念上の種族本体たる神、という統一者への讃仰のためにする共同労働の形でも行われる。……労働により現実に取得することの共同体的条件、即ちアジアの諸民族の場合に極めて重要であった灌漑、交通手段等々は、この場合には上位の統一体、即ち小さな諸共同体の上に漂う専制政府の事業となって現れる。この場合、本来の都市は、上記の村落と並んで、対外貿易に特別有利な地点や、又は国家の首長とその太守が、彼等の収入(剰余生産物)を労働と交換し、この収入を労働ファンドとして支出しているところにだけ形成される。」

マルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態』は(私をして言わしむれば)その基本的にして包括的な論理の展開において、彼の今一つの著(厳密には、エンゲルス

との共著),『ドイツ・イデオロギー』(彼の経済学,哲学の真摯な研究には不可欠の,それを欠いてはいかなるマルクス研究も陳腐,不毛に墮す他ないと極言出来る程の)に酷似している。(この点に気付いている唯一が,F・テーケイ『アジアの生産様式』である。)

たとえば,先の援用の前半を,後者における次の叙述(の調子,たとえば同じ様に「前提」という語の頻出する)と比較,対照せよ。

「無前提的であるインド人のもとでは,我々は,あらゆる人間的存在の,従って又,あらゆる歴史の第一の前提を,確認することから,始めなければならない。」「我々が発する前提は,なんら任意のもの,なんら教条ではない。それは,ただ想像のうちでのみ捨象され得るところの,現実的な前提である。それは,現実的な諸個人,彼等の行動であり,そして眼の前に見出されもすれば自分自身の行動によってつくり出されもするところの,彼等の物質的な生活条件である。従って,これらの前提は,純粋に経験的なやり方で,確認され得るのである。すべての人間史の第一の前提は,勿論,生きた人間の個体の生存である。従って,確認され得る第一の事態は,これら個人の身体的組織と,そして,これによって与えられるところの,その他の自然への彼等の関係とである。我々ここでは勿論,人間自身の肉体的性状にも,又人間の眼前に見出される自然条件,即ち地質学的,地理学的,風土的その他の諸関係にも,立入るわけにはゆかない。すべての歴史記述は,これら自然的な基礎と,歴史の行程での人間の行動によるこれらのものの変更とから,出発しなければならない。」

如上の援用における結び——「すべての歴史記述は,これら自然的な基礎と,歴史の行程での人間の行動によるこれらのものの変更とから,出発しなければならない」(その含意するところの命題は,前記二著に共通する基本的前提である)は,本稿の立場よりして,殊更に重要である。

何故なら,実に,ウィットフォーゲルの執着するもの,この箇所には,一つは,あるからである。

たとえば,ウィットフォーゲルは,『支那の経済と社会』第一章を,この箇条に言及,援用することにより,始めている。

即ち,言う。

「マルクス主義の創始者達が立てた一テーゼによれば,『一切の歴史の叙述』は,従って疑いもなく一切の経済の記述及び社会史の記述も,『自然的な諸基礎,しかもこの基礎の上に,人間の活動が,歴史過程の中に,いかにそれを変更するか』,ということから出発しなければならない。もとより,その一般的形態におけるこのテーゼは,実際に使用するには余りにも抽象的であるから,従って,マルクス,エンゲルスによっても又,ヨリ一段

と精密に規定せられている。マルクス、エンゲルスによれば、すべての歴史の『自然的諸基礎』は、二つのグループに分たれる。即ち、第一には『人間自身の生理的性状』、それは今ここに引用する以外の他の箇所における諸々の註が補足的に叙述している様に、特に人種という要因が指示されている一概念である。しかるに第二のものは次の定式を意味する。『人間によって見出された自然諸条件、地質学上の山嶽誌学＝水文学上の、気候学上の、その他の諸関係』である。支那の経済的＝社会的発展の叙述も又、それがマルクス学派の意味における方法的正確さを要求する限り、その出発点を前述の二要因から採らねばならぬ。」

実に、ここにこそ、ウィットフォーゲルにとっての肝要がある。

しかるに、斯かるウィットフォーゲルを、俗流なるマルキスト(自らの独自の思考を欠いた、単にマルクスの言葉の端々を反芻するしか能力のないところの)は、時に御用学者の(卑しき)口吻をもって、嘲笑する。——「地理的歴史観」、「幼稚な地理的決定論」……「機械論的な傾向」、……「地理的唯物論」、「プレハノフ的見解」、と。

これこそ、マルクスの所謂「教条」以外の何ものでもない。

マルクスの場合、経済、社会の(歴史的)考察に、いかに「地理的歴史観」——地理、風土など(外的自然)の考察を不可欠、必須としているかは、たとえば、『ドイツ・イデオロギー』の先の叙述とその周辺を今一度読み直すことによって、更には、(それと、完全に同一意味を示しているといつてよい)『資本主義的生産に先行する諸形態』における次の強調に目を通すことによって、まさしく、自明となる。

「人間が、結局、定住するようになると、この本源的共同社会が、どの程度まで変形されるかは、様々な外的、気候的、地理的、物理的等々の条件と共に、人間の特殊な自然的素質等——彼等種族の性格——に依存するであろう。……大地は、労働手段や労働材料を提供して居住地や共同団体の基地を提供するところの大きな仕事場であり、兵器廠である。人間は、共同団体、しかも、生きている労働によって自己を生産し、又再生産する共同団体の財産である大地と素朴に関係する。……労働過程を通じて行ふ現実の取得は、それ自身労働の所産ではなくて、労働の自然的な、もしくは天与の前提として現れるような前提のもとで行われる。」

ウィットフォーゲルの論稿「経済史の自然的諸基礎」に言う。

「自然的基礎……斯かる基礎の分析なしには、又斯かる基礎の上に行われる発展の斯かる基礎からの説明なしには、産業の歴史的過程の合法則性は、科学的に闡明され得ないと、明らかである。」

とりわけ、自然的側面に拘束されることが多い(低次の経済である)アジア生産様式の考

察に、かかる考慮の必須なること、最早、喋々を要しない程である。

たとえば、マルクスは、自然が産業史上決定的な役割を演ずる、と、次の如く、『資本論』に敷衍させている。

「社会的生産が、ヨリ多く発展した態様をもつか、ヨリ低く発展した態様をもつかは別として、とにかく、労働の生産性は諸種の自然条件に結びつけられている。すべてこれらの自然条件は、人種等のような人間そのものの自然と、彼を取巻く自然とに帰着せしめ得るものである。外的自然条件は、経済的には、二つの大きな部類に分れる。生活手段における自然的富、即ち土地の豊饒性、魚類に富む河海湖沼、等々と、労働手段における自然的富、たとえば急激な落水、航行し得る河川、森林、金属、石炭、等々とである。文化の初期においては、第一の種類の自然的富が、ヨリ高い発展段階においては、第二の種類のそれが決定を与える。……自然力を、社会的に統御し、これを節約し、これを人工によって大規模に先づ占有又は馴致する必要は、産業史上において最も決定的な役割を演ずる。」

今日、資源問題において、或は公害問題において、(歴史を欠く)近代経済学は言わずもがな、マルクス経済学さえもが、殆ど無能力といって差支えない根本的理由の一つが、彼等の祖師における斯かる重要な看過にあったことを、(私は)とりわけ強調したい。

歴史を欠いた社会科学(経済学)がナンセンスである如く——と同時に——歴史を知るために地理は不可欠である。「百年以上も昔、ヘーゲルは世界史の基礎としての地理という命題を掲げた。」「地理は歴史の生きた基礎である。」(ロートシュタイン)

いわば、「地理的歴史観」の如き、むしろ、しきり、推奨さるべき性質の考慮である。ウィットフォーゲルの言う。

「従来すべての歴史観は、歴史のかかる現実的な基礎を、全然捨てて顧みなかったか、もしくは、これを附属物としてしか考察していない。斯くして、自然に対する人間の関係は、歴史から排除され、従って、自然と歴史との対立が作り出される。」

更に、我々は、ウィットフォーゲルの立場が、自然的要因のみを一義的、決定的に重視し、社会的要因はこれを無視乃至閑却して差支えないとする(それはまさしく「幼稚な地理的決定論」以外の何ものでもない)のではないことを、その様な誤解はこれを避けなければならないことを、改めて、確認しておく必要がある。

ウィットフォーゲルは、近著『東洋的専制主義』に書いている。「歴史的諸条件が等しいとすれば、大きな自然的差異が決定的な制度的差異の原因」、と。

即ち、歴史的諸条件が等しい、という前提が、ここでは、不可欠なのである。

旧著「経済史の自然的諸基礎」にも、同様の叙述がある。「社会的労働過程の形態内で、自然に向い積極的な態度をとる人間は、社会的生産諸力の一定の状態を前提すれば、彼の手に入る自然的労働手段と、『天地』から獲得する自然的労働対象とが許す範囲内でのみ、その活動性を形成する」、と。

即ち、ここでも、社会的生産諸力の一定の状態を前提、してのロジックなのである。

「社会的に労働する人間が、どんな自然により条件づけられた契機に『出会うanschlagen』か、それを制約するものは、勿論、社会的に発展した生産諸力(労働の技能、科学及びその技術学的適用、労働組織、生産されたる生産手段の範囲及び作用)の全体である。しかし、その社会的形態における労働過程の変化が、如何なる方向に行われ得るか——そして一般に、かかる変化が行われるか否か——これは、生産する人間の恣意に由来するのではなくして、社会的にその際『到達し得る』ところの、自然により条件づけられた生産諸力の態様、多様性及び組合せに依存するのである。」

従って、ウィットフォーゲルにとって、マルクス体系の一方的(不当な)理解——たとえば、生産関係(所有関係)のみを——惹いては、アジア的生产様式の既念についてさえ、「土地所有」の問題のみを——何かの一つ覚えよろしく、強調する一般的、通常のやり方(所謂「アジア的生产様式論」なるものの殆ど——マジャール一派を除く)が、全く我慢ならぬものであることは、言うまでもない。

ウィットフォーゲルの言う。

「問題の社会的側面のみを専ら問題とする経済的发展の分析は、いづれも不完全であり、不具であり、誤っている。」

ウィットフォーゲルが、殊更に、「生産様式」を強調する所似である。

「生産様式なる既念においては、社会的な契機が考慮のうちに入れられる必要があるとはいへ、社会的に労働する人間の自然に対する関係が前景にある。(これに反し)生産関係なる概念にあっては、屢々労働技術的な、自然に向けられた側面が同時に考えられているとはいへ、事物の社会的側面が前景にある。……常に先づ、社会的に労働する人間の自然に対する関係が、次に始めて、人間相互の関係が問題となる。」

「……我々は、『現実的生产過程』、即ち社会的に労働する人間と自然との物質代謝 Stoffwechsel から出発すべきである。……(しかも)多くの本質的に非進歩的な経済史のみでなく、進歩的な人々による経済史的=社会史的労作の殆どすべてが、ここに提供された要求を満足させていない。」

ウィットフォーゲルを評して「機械論的な傾向」というのが、いかに彼、ないし彼の方

法論に無知であるかの証左であるかは、敢て贅言を要しない。

ウィットフォージェルの努力は、むしろ、従来の機械論、所謂「環境論」からの脱却にあった。(批判者は、せめて、地理学の方法論史の一頁にも目を通す必要がある。)

その詳細な議論は後に譲るとして、単的に言えば、こうである。

ウィットフォージェルが「生産様式」なるマルクス固有の範疇を、とりわけ、尊重したところ、彼の立場が、機械論的でなく、むしろ、逆に、有機体論的な方向(彼は、有機体の本質乃至基本的機能である「物質代謝 Stoffwechsel」、或は「交互作用 Wechselwirkung」なる言葉を多用している)にある、と言ってよい、その主要な理由である。

ウィットフォージェルによって、再言しよう。

「我々は『現実的生産過程』、即ち、社会的に労働する人間と自然との物質代謝 Stoffwechsel から出発すべきである。」

「生産諸関係、『社会の経済的構造』は、その基礎づけを、生産様式のうちに、言い換えれば、いかにして人間が彼等の生計を獲得するかという、その仕方のうちに、発見するものである。ところが、生産様式は、そのうちに総括せられて、労働過程になるところの、生産諸力によって、その究極的規定を受けるものである。」(ウィットフォージェル『支那の経済と社会』)

「その時々活動する生産諸力の全構造が、一つの歴史の時代の経済的構造を制約する。かかる全構造は、しかし、生産様式において総括される。」(「経済史の自然的基礎」)

換言すれば、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』における先のテーゼの「二要因」——その二要因を機械的＝直接に媒介するのではなく——「物質代謝」を軸とした有機的＝間接な媒介、その「中間項 Zwischenglieder」として、「生産様式」(生産力——生産様式——生産関係)を、ウィットフォージェル(マルクス)は認めるである。

「生産様式とは『現実的生産過程』、即ち、人間と自然との、その時々『物質代謝 Stoffwechsel』の本質的な要素の全体である。」

「自然は、この中間項の媒介によって、始めて社会生活や経済生活や政治生活の態様及び発展の上に影響を及ぼすものであり、又人間は、この中間項の媒介によって、始めて自然に作用するものであって、この中間項の変ると共に、両者の作用も又変化せざるを得ない。」

マルクスの『資本論』(第一章、第二節)に拠って、(しかも、自然的側面の極めて強い強調をその文意として伴う、に拠って)換言すれば、こうである。

「……上衣、亜麻布等、自然的に存在しない素材的富のあらゆる要素の存在は、特別な人間的要求に特別な自然素材を同化させる特殊的な合目的々に生産的な活動によって、常に媒介されなければならなかった。……労働は、すべての社会形態から独立せる人間の—

存立条件であって、人間と自然との間の物質代謝 *Stoffwechsel* を、従って、人間の生活を媒介するための永久的自然必然性である。……商品体は、自然素材と労働なる二つの要素の結合である。上衣、亜麻布等々に含まれている一切の異なる有用労働の総和を引去るならば、常に人間の加工なく自然に存在する物質的基盤が残る。人間は、その生産において、自然自身がするようにする外仕方のないものである。即ち、ただ素材の形態を変更する外に仕方のないものである。……更に、この形を与える労働自身において、人間は不断に自然力によって支援される。従って、労働はこれによって生産された使用価値の、即ち素材の富の、唯一の源泉ではない。ウィリアム・ペティが言うように、労働はその父であって、土地はその母である。『土地、空気及び水は、田野において、穀物に転化され、或は人間の手によってある種の昆虫の分泌物が絹糸に転化され、或は若干の金属の小片が一つの時計打懐中時計をつくるために組立てられるのである。』」

ウィットフォーゲルも、同様（というより、如上のマルクス（ペティ）の言葉の一部を頭書に借りて、しかも末尾に『ドイツ・イデオロギー』の先のテーゼを援用）、その『支那の経済と社会』において言う。

「生産諸力なるものには、社会的側面の他に、自然的な側面がある。前者は、生産過程の内部において積極的な因子、即ち『父的』要因を、後者は、『母的』に受動的な要因を形成する。前者は、実践的に活動しつつある人間が、彼等の歴史を、彼等の経済史をも又自ら作るということを示す。しかるに、後者は次のことを示す。なる程、このように活動的な人類が彼の歴史を自ら作りはするが、しかし、それは、人類によって作られなかった全く特定の諸条件の下に、即ちその具体的姿容は社会労働の生産性と態様とに適應して変化するが、しかし、それらを構成する諸要素の一切の機能の諸推移にも拘らず根本的に不断に作用を及ぼし、従って社会のヨリ以上の発展の態様に対しては尚決定的であるところの、自然諸条件の下においてであるということ、従って、マルクスはこう要求する。『一切の歴史記述は、これらの自然的諸基礎、しかもこの自然的基礎の上に、人間の活動が、歴史過程において、如何にそれを変更するか、ということから、出発しなければならぬ。』」

「機械的＝直接に媒介」、「有機的＝間接な媒介」という、先の（私の）語法に関し、むしろ、ウィットフォーゲルが、それを、そのまま裏付けるかの如く、——しかも、本稿にとって一層都合なことには、ヨリ優越せる彼の立場からする「機械論的な傾向」（地理学でいう所謂「環境論」）の批判として——『支那の経済と社会』（第一章）に、ズバリ、次の如く述べている。（本稿清書後に発見）

「……リヒトホーフエン（F・von Richthofen『支那 China』——筆者）の見解に従うと、もし、人が、事実に基礎を置いた原理を彼の結論に採り入れるものと仮定するならば、一領域の住民の性格は、その『地理的環境』の反映であるだろう、と。まことに、

この見解は、事実上、今日現存している支那学の諸著書のうちでも、個々人の間には多少の差はあれ、かなり一般的に、繰返されている謬見である。元来、我々は気候に関して、否、根本的には、全地理的環境論に関して、すでにヘーゲルが、彼の弁証法的本能によって、警告しているところの、斯かる見地に与してはならないのである。むしろ、我々は、リヒトホーフェンが時たまやって居り、最近では、エルケスやウィルヘルムが、とにかく、それに付け加えているところのものを高めて、それを、我々がこの問題を討究する際の強い導きの糸にまで、してしまわなければならぬ。言い換えれば、『地理的環境』（それは、自然的基礎の作用上の変化を隠蔽する静的な表現であるが故に、全く不正確な一表現である）が、直接に、人間の性質と意識とに影響を及ぼすのではなくて、むしろ、間接に、即ち、人間が彼等の物質的生活のための配慮をいかに遂行するか、そして、いかに自分を社会の一股体たらしめているかという、その当該の態様、仕方の媒介を通じて、影響を及ぼしているのであるということが、実証されねばならぬ。」

マルクスの信奉者達（「追随者達」、即ち垂流）が、「生産様式」（とりわけ、その原形というべく「アジア的生产様式」におけるそれ——勿論、生産様式の模範は、近代ブルジョア的生產様式である）を等閑にしたこと、ために、彼等の議論が体系を欠くは勿論、浅薄皮相に走らざるを得なかった所以を、ウィットフォーゲルは（却って）難ずる。

「生産様式というマルクスの概念を没却するために、一連のマルクス主義的研究家達は、マルクスが『アジア的生产様式』と名付けたところのものを、単に外面的にのみ取扱ひ、又、時としては、これを否定するにさえも至らしめられた。マルクスの歴史研究の一般的諸範疇を、完全に承認するが故にこそ、我々は、又、この特殊な範疇をも、本労作のプラン中に、意識的に採り上げるのである。近代的資本主義が関した経済史に対して妥当することは、また、かの広大なアジア的農業諸社会の考究に対しても、正しいものと考えられる。従って、人々がアジア的生产様式というマルクスの核心概念を充分に知悉しないならば、これら農業諸社会の、あらゆる一切の社会経済的探究は、結局、無益たるべき運命を宣告されるものである。」

勿論、今日時のマルキストに往々見らる如く——生産様式(更には生産関係)自体の尊重が、(奇妙なことだが)却って、先の「二要因」の軽視に導くならば、これ又、ウィットフォーゲル(マルクス)の真意と隔たること、甚だ遠いというべきである。

マルクスのテーゼを反芻しつつ、ウィットフォーゲルの言う。

「生産の仕方が先づ第一だ。しかし、その内部で生産諸力の自然により条件づけられた部分に、明々と光が投げかけられることが必要である。だから、すべての歴史記述は、斯かる自然的諸基礎及び歴史の経過におけるその変容から出発しなければならないのである。」

如上の結びが、『ドイツ・イデオロギー』からの援用であることが、まさに象徴している如く、ウィットフォーゲルの志すところは、他でもない、マルクスが意味させたところの原意を、真に、極度に、（マルクスの全著作、全体系、含蓄のすべてのうちに、有機的に）生かさんとするにある。

「『アジア的生産様式』という考えとその明確な概念規定とは、疑いもなく、マルクスが一朝にして作りあげた見解ではなくて、彼の社会構成に関する理論の有機的な一部分である。」（テーケイ）

有機的——たとえば、ウィットフォーゲルの（アジア的生産様式についての）成果とマルクスの史的唯物論とは、いかに（有機的に）結びついているか。

ウィットフォーゲルによれば、「マルクスの歴史分析の本質的な道具は、史的唯物論である。」

しかも、彼の立脚する「部分」は、「マルクス史的唯物論の特定の核心的要素——プレハノフとレーニンとを除いた——全どすべてのマルクス主義学徒によって……閑却され、看過され、誤解されている」ところの、それである。

「この書（『支那の経済と社会』——筆者）で、我々は、マルクスの研究方法を、その完全な唯物論的非妥協性の下に、適用せんことを努める。それ故に、我々の研究においては、生産様式という範疇が、抑々、その創始者（マルクス）がそれに与えようと考えた中心的な地位を取戻している。生産様式という範疇と共に、生産力なる範疇が中心に向って現出する。」

就中、ウィットフォーゲルの場合——「この生産力なる範疇の内部では、社会的な生産力と並んで、それと共に自然によって条件づけられた生産力を、マルクス及びエンゲルスが意味したところの決定的意義において、歴史分析のうちに根をおろさせることが、この上なく肝要である。」

「自然によって条件づけられた諸因子の客観的な部分を取扱う場合……この場合には、既に今日では、最も重要な諸連関が、ここに把握せられ得る。と言うのは、……この生産諸力のグループを……研究すると、社会的に条件づけられた生産諸力の分析……への直接的移行は、まさに、このグループの生産諸力から、有機的に生ずるからである。」

斯くして、（たとえば）「マルクスは、近代資本主義の社会的諸範疇を説明するに當って、常に、これらの範疇の基礎をなしている、自然的に物的な諸要因を、予め明瞭にしたのである。……マルクスが、一経済形態……を分析した場合には、常に斯かる態度をとった。従って、広大な東方の社会体を研究するにあたって、決定性をもつ生産諸力及び自然諸条件——それらから、この生産諸力が、弁証法的交互作用をなして、生ずる——の詳

細なる解明を絶対に必要とするのも、この理由からである。……自然によって条件づけられた生産諸力の特質が、確定された時にのみはじめて、社会的機構全体の分析は、有効に遂行され得るのである。」

換言すれば、(ウィットフォークゲルによれば) 史的唯物論は、むしろ(悪名高き)「地理的唯物論」にして、初めて、その本来の有効を保障され得るのである。

「経済的關係及びその他一切の社会的關係を左右するものは、生産力の発達であり、生産力を左右するものは、地理的事情の性質である。」(プレハノフ『マルクス主義の根本問題』)

「詳細に検討された最終的なアジア的生产様式概念をマルクスのもとに求めるのは、到底、正しくないであろう。……どの研究者も、東洋諸国における歴史過程の歩みに関する自己の論理や自己の表象に準拠しながら、マルクス、エンゲルスの断片的な諸指摘、つまり、相異なる諸時代における東洋諸国の経済生活や社会生活の個々の諸現象に関する彼等の観察と分析を体系化しようとしている。だからこそ、アジア的生产様式の叙述がこの様に種々様々に違っており、問題がこれ程討論されているのである。」(A・И・パヴロフスカヤ)

マルクスによって捉えられたアジア的生产様式のカテゴリーは、(今日における如く、それが如何に多種、多様な解釈と結論とを導出するとはいえ——私をして言わしむれば) 他の生产様式、即ち古代的、封建的、近代ブルジョア的生产様式と同じく、それがまさに一つの、独立した生产様式(マルクスにおける固有の経済的カテゴリーとしての)であることに、何ら変りはない、と、いうべきである。

ヴァルガは書いている。

「明かに、マルクスは、ヨリ後期の諸生产様式と同じような歴史的意義を、アジア的生产様式に対して与えている。……マルクスは、アジア的生产様式が他のすべての生产様式とは原則的に違っているという考えを、屢々述べた。……もしも我々が、マルクスが叙述したようなアジア的(東洋的)生产様式と、西ヨーロッパにおいて存在した古典的な封建制度とを、科学的抽象物として純粹な形で表象し、この両者を比較対照してみるならば、問題にされているのは、相異なる上部構造を伴う相異なった二つの生产様式であるということが、明らかになるであろう。」

この第一の、しかも、何より基本的な確認は、(ヴァルガの先の援用にもヒントされている如く) 附則的には、更に、次のこと(既述)を我々に改めて確認させることとなる。

マルクスのアジア的生産様式——「アジア的経済形態は、理論的構成であり、マックス・ウェーバーによって説かれたような理念型に属する」(森谷)ということ、これである。

「理念型を構成する個々の諸現象は、ここには多く存し、かしこには少く存し、ところによっては全く存在しないのである。理念型としての理論的構成は、現実についての具体的認識を得るための概念的補助手段として用いられ得るが、ただちに歴史的現実と混同されてはならない。」

「『生産様式』という表現は、社会的生産の規定的な諸指標を科学的に抽象化し、区別し、総括したものである。社会的生産のこれらの規定的な諸指標は、純粋な形態では現実には決して存在しなかった。」(ヴァルガ、前掲著)

従って、たとえば、次の如き見解は、当然、ヴァルガによっても、又我々の立場からしても、これを採らないのである。

「抽象的に捉えられた構成体は、特定の一生産様式の上に基いている。だが、具体的な社会は、色々の生産様式、色々のウクラード、色々の階級関係をその中に含むことが出来る。……ところが、他のウクラードが存在するもとで独自の『アジア的ウクラード』が存在したような実例は、一つとして示すことは出来ない。これは、特殊アジア的な生産やそれに対応する生産関係が存在しないが故に、当然なことである」、と。(C・M・ドゥブロフスキー)

これは、まさしく我々における理論の、概念の基本的意義、価値——の看過、喪失、或は悪しき意味での概念と実在、理論(仮設——前提(条件)を含む)と現実、の混同を示している。

マルクス(エンゲルス、更にはヴァルガ)の以上の叙述に最早、明確である如く——

「理念型としてのアジア的経済形態……アジア的経済形態は、アジア乃至東洋という呼称が容易に想起させるような特殊な自然的並びに歴史的な諸関係によって条件づけられていた、経済形態である。それは、歴史的後景の東洋において、最も優勢な姿態をとって出現するが、しかし、専ら東洋乃至アジアにおいてのみ成立を見た、というのではない。そればかりでなく、それは、東洋の歴史的後景においては、どこでも同じように優勢な形態をとって現れた、というのでもない。……アジア的経済形態が、最も典型的な姿態をとって出現したのは、中国、インド、及びエジプト等の歴史的後景においてである。というのは、それらの諸国は、アジア的経済形態の成立にとって決定的な意義を有するような自然的並びに歴史的諸条件を充分、具備したからである。それらの諸条件というのは、第一に、一国が農業段階にあって、その農業が水路その他の水利設備による人工灌漑を基礎としているということ、第二に、治水の範囲が広大で、超地方的な大規模な治水課題が存し、そのために広大な領域の住民の組織化を必要とするということ、第三に、治水課題の

遂行について住民の自発的な組織を期待するには文明の程度があまりに低く、治水課題も余りに大規模であるということ、しかも、最後に、一層文化の低い遊牧民族侵攻の大きな脅威をもつこと、などである。それらの諸条件が具備する場合、政治的権力と、その物質的基礎をなす土地所有は、集中化された形態をとらなければならないが、中国、インド、イラク、及びエジプト等において集権的、官僚制的体制の成立を見たのは、このような諸条件が充分、具備したからに他ならない。」(森谷)

それは又、ウィットフォーゲルが、労働手段としての「水力」(水利、人工灌漑)をアジア概念のメルクマルとして認め、「水力農業」……「水力経済」……「水力政権」……「水力国家」……「水力社会」……「水力的専制」……、と(唯物論的に)発想した所似である。

「私は30年間、東洋的専制の制度的背景を研究した。その間の相当期間、私はそれを『東洋的社会』と呼ぶことに満足してきた。だが、研究が進むにつれて、新しい名称の必要を感じてきた。……『水力社会』及び『水力文明』という名称の方が、伝統的な用語よりも、ここで取扱う社会秩序の特殊性をより適切に表現すると確信するに至った。……私の定義する『水力的 hydraulic』という用語は、政府のもつ顕著な役割を強調することによって、これらの文明の農耕管理者の乃至農耕官僚制的性格に注意をひきつけるのである。」(『東洋的専制主義』、序言)

『支那農業経済論』の著者、マジャールは、同著第二章「水の意義」に書いている。

「プレハノフは、人工灌漑の意義と役割を非常によく理解していた。……レーニンも又、東洋の農耕諸条件の下における人工灌漑に対して、重要な意義を附与した。……エジプト及びアルジェリアにおける灌漑施設の役割と意義については、ローザ・ルクセンブルグが優れた評価を下している。……斯くして、農業生産の観点から見る場合、灌漑制度の有する意義は疑う余地がないのである。従って、この事実を強調したエンゲルス、マルクス、及びルクセンブルグは正しいのであって、この事実をば『東洋の蒼穹の鍵』として見ない者は間違っている。」

ウィットフォーゲルは又、(彼の研究歴の一端を)『東洋的専制主義』序言に、次の如く、書いている。

「私は1922~23年の冬、マックス・ウェーバーの影響の下に、水力的な社会と国家の特殊性を研究しだした……。……1924年に、今度はウェーバーと共にマルクスも引用して、『アジア的』社会を官僚主義的な専制的国家に支配されるものと規定した」と。

「東方の経済(支那、近東アジア、エジプト)においては、灌漑耕作が決定的意義を有した。……この事からして、これらの国々に建築及び治水上の官僚が発生した。」(ウェー

ーバー『経済史』)

アジア的生産様式——アジア的停滞が、いかに固有にして頑固——長命なものであるか、について、マルクスは、たとえば、『資本主義的生産に先行する諸形態』に、次のように述べている。

「アジア的形態は、もっとも強固に、又、もっとも長く維持されることが避けられない。このことは、その前提のうちに、即ち、個々人が共同体に対して自立的になっていないこと、生産の規模が自分自身の生活維持の保障だけを目当てにしていること、農業と手工業とが一つに結合していることなどの上に基礎づけられている。」

就中、インドの場合について、「インドにおけるイギリスの支配」に、書いている。

「内乱、侵入、革命、征服、飢饉、それらが相次いでヒンドスタンに及ぼした作用が、どんなに奇妙な程複雑で、急速で、破壊的であるように見えても、それはすべてヒンドスタンの表面に触れただけであった。……インドでは、これまでどんなに政治の姿が変わったように見えても、その社会的条件は、最古の時代から変ることなく19世紀の最初の10年代まで及んだ。」

アジア的生産様式は、19世紀、アジアの歴史における一つの大きな修正によって、変革を迫られることとなった。ヨーロッパ、特にイギリスにおける産業革命、それと歩調を揃えてのイギリスのインドへの（経済的、軍事的、政治的）侵入——「それまでアジアに起った最大にして、実をいうならば唯一の社会革命をもたらした」（マルクス、前掲 著）——就中、東インド会社による侵入が、象徴的である。

マルクスは書いている。

「七年戦争が起ると、東インド会社は商業的権力から軍事的、領主的権力に変わった。東洋における現在のイギリス帝国の基礎が置かれたのは、この時である。……1838年から1849年までの間に、イギリスはシク戦争とアフガン戦争を行って、パンジャーブとシンドとを強制的に併合し、このことによって、東インド大陸の人種的、政治的、軍事的国境を決定的にその領有下に置くことになった。……18世紀全体を通じて、インドからイギリスに運び出された財宝は、割合小規模であった貿易から得られたというよりも、むしろ、インドを直接に搾取したり、インドで強奪した巨大な財産をイギリスに送ったりして得られたものであった。……1813年にインド貿易が自由化されてから……貿易の全性格が変わった。はるか昔から世界でも最大の綿織物産地であったインドは、今はイギリスの綿糸や綿織物で溢れるようになった。」

「イギリス商品の東インドへの輸出に長期に亘って抵抗……していたものは……農業と手工業との結合である。東インドでは、この結合は特殊な土地所有制度に基礎を置いていた。だが、この国の最高の地主の地位についたイギリスは、その土地所有制度を掘り崩す

ことが可能であったし、このようにしてヒンドゥ人の自給自足的な共同体の一部を強制的に、イギリスの織物と交換にアヘン、綿花、藍、大麻、その他の原料を生産する単純な農場に変えることが可能であった。」

「古風に固定化した形態の破碎は、ヨーロッパ化のための必須条件であった。……古代的な工業をなくしてしまわなければならなかった。このことが、村落から自給的な性格を奮ったのである。」(マルクスのエンゲルス宛書簡, 1853年6月14日)

「イギリスの侵入こそ、手織機を破壊し、紡織機を粉碎した張本人である。……イギリスの蒸気力とその科学は、全くヒンドスタン地方において農業と工業との結合を粉碎した。」

「イギリスは、インドで二重の使命を果たさなければならない。一つは破壊の使命であり、一つは再生の使命である。——古いアジア社会を滅ぼすことと、西欧的社会の物質的基礎をアジアに据えることである。……インドにおけるイギリス人の歴史は、破壊の外何等の術をしていない。」

マルクスは、『資本主義的生産に先行する諸形態』に、斯かる「破壊(崩壊)」の経済(学)的意味を、次のように述べている。

「……自由な労働の貨幣との交換は、賃労働の前提であり、又資本の歴史的条件の一つである。もし、そうだとすれば、もう一つの前提は、自由な労働を、それが実現される客観的条件——労働手段と労働材料——から、分離することである。従って、何よりも先ず、労働者を彼の天然の仕事場としての大地から切り離すこと、——それ故に、自由な小土地所有、並びに東洋的共同体を基礎とする共同体的土地所有を解体すること、である。」

或は、『資本論』に書いている。

「資本主義制度の根底には、生産者と生産手段との根本的分離が存在する。……だが、この発展全体の基礎は、耕作民の収奪である。」

換言すれば、イギリス(産業資本)のインドへの侵入は、資本の(殊にその「創世紀」の)悪しき側面——マイナスの面のみを、インドに強制することになった——又インドの体質自体にその様な誘因があった——と言うべきであろう。

インドの「歴史的宿命」において、従来とは又異った意味での停滞性(植民地的停滞)が、古きそれに接徳されることになったのである。

今日のインド——更には、中国（ソヴィエト）においては、最早、アジア的生産様式の（問題）は、解体（解消）済みと考えるとよいものだろうか。

ウィットフォーゲルは設問する。

「水力社会……この社会は数千年に亘って——西方の新興の産業と商業の衝撃を受けるまで存在を続けた。それに続いて起った連鎖反応は、古い秩序に新しい形態と新しい方向を与えた。では、我々がこれまで行って来た伝統的な水力社会に関する分析は、このような新しい発展の理解に役立つだろうか」，と。

「インドからロシアに至る……最も粗野な国家形態である東洋的専制主義……。」（エンゲルス）

ウィットフォーゲル『東洋的専制主義』（の基本のテーマ）は、実に、斯かる問から出発したのである。——彼自身の変身，換言すれば，本稿（の援用した彼の旧著）における彼自身の命題，結論のいくつかの変更は，斯くして，なされたのである。

イントロ，開始。

〔未完〕